【主題】「主体的に学習に取り組む態度」の測定法とその影響

【副題】章末テストを軸とした継続的な学習サイクルを通して

【学校・団体名】　塩竈市立第一中学校
【役職名・氏名】　教諭・鈴木 康紀

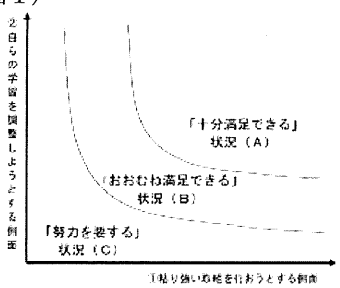
1. はじめに

平成29年度～平成31年度の学習指導要領の改訂に伴い，評価の観点が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」となって数年が経過した。この中でも「主体的に学習に取り組む態度」は，「関心・意欲・態度」から捉え方が大きく変化し，現場でも多くの議論となった。

以前の「関心・意欲・態度」の評価の観点では，児童生徒の性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えてしまいがちな側面があることや評価の結果が児童生徒の学習改善に具体的につながっていない等の課題が指摘されており，それらの改善が求められている。しかし，「主体的に学習に取り組む態度」は抽象的なものであるため，改訂から数年が経過しているが，その内容を吟味し，積極的にはたらきかけることができていないのが実情である。「主体的に学習に取り組む態度」がどのようなものかを具体的に理解し，積極的にはたらきかける態度の必要性を感じている。

2. 研究の目的（ねらい）

本研究では「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な評価方法について考察・検討すると共に，それが学習者の学力にどのように寄与するのかを検討するものである。「主体的に学習に取り組む態度」は中教審で「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」という２つの要素から構成される。（図１）



（出典：中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会
「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」）

図１　主体的に学習に取り組む態度の捉え方

以上の点から，生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を見とり，評価していくためには生徒が「粘り強く取り組むことができる課題」「自ら学習の調整ができる課題」を設定し，運用していかなければならない。

しかし，現場では依然と変わらないワークやノート提出等で生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を評価していることが多い。このようなすべての生徒が教師から指示された画一的な内容をこなすだけでは，「主体的に学習に取り組む態度」の測定は不十分であると言わざるを得ない。特に，「○ページから△ページまで」という形で課されるワークなどの課題は，やること自体が目的となりやすく，「主体的に学習に取り組む態度」を測定する材料となり得ない。

そこで，本研究では「粘り強い取組を行おうとする側面」，「自らの学習を調整しようとする側面」を必要とする課題を提示し，「主体的に学習に取り組む態度」を測定する方法の妥当性を検討する。また，その態度が生徒の「知識・理解」や「思考力・判断力・表現力」といった試験で測ることのできる「学力」に及ぼす影響を明らかにし，「主体的に学習に取り組む態度」を具体的に捉え，見とる方法を提案していきたい。

3. 仮説

本研究では「主体的に学習に取り組む態度」に関して，以下の２つの仮説を立て，検証していく。

【仮説①】
ワークの問題をそのまま活用し，追試を行う章末テストは，「主体的に学習に取り組む態度」を測定する方法として，妥当である。

【仮説②】
「主体的に学習に取り組む態度」が身についている生徒は，自身の学力を向上させることができる。

4. 方法

まず，本研究で行った「章末テスト」「ワーキングノート」「章末レポート」の３つの取り組みについて説明を行う。

（1）章末テスト

理科の中単元の区切りに行うテストである。１つの大単元で３～４回行った。

【章末テストのルール】
① 学校副教材(ワーク)の問題をそのまま出題する。
② 定期的に追試を実施する。
③ 自分のテストの点数で納得しない場合，追試を受験してもよい。
④ 追試を受験して点数が向上した場合，よい結果の方を採用する。
⑤ 追試は章末テストと同じ問題で行う。

①は生徒が「何を」学習すべきかを焦点化し，主体的に取り組めるように行った工夫である。②～④のルールは生徒が「粘り強く」かつ「自ら学習を調整」しながら学習を進めていけるよう設定したものである。大きな工夫点は，学校副教材であるワークの問題を抜粋し，そのまま出題する点と追試制度の導入である。これらの取組を融合させることにより，生徒自身が個々に目標を設定し，その目標に向けて粘り強く取り組めるようにした。

（2）ワーキングノート

理科の自主学習用のノートである（図２）。下記のルールに従って運用した。

【ワーキングノートのルール】
① 理科の問題演習のみを行う。
② 自主学習帳(学校の副教材)，市販の参考書や問題集など何を使って学習しても良い。
③ 行ったページ数を評価として加える。
④ 実施するページ数は指定しない。自分の実態に合わせて自分で分量を決める。

①～④のすべての取り組みは生徒自身で学習の内容，や分量を調整できるようにしている。決められた範囲のワークの提出のような画一的な課題では「学習の調整力」を見とることはできない。本実践では，章末テストや定期考査に向けて，「何」を「どの程度」行うかを各自で考え，望む成果に向けて継続した努力ができるよう配慮した。

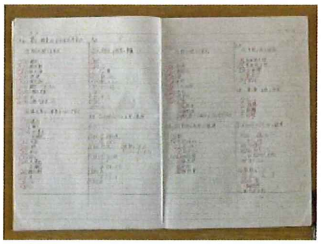


図２　ワーキングノートの例

（3）章末レポート

章の学習内容をまとめたレポートである（図３）。下記のルールに従って運用した。

【章末レポートのルール】
① 指定の用紙(A3 判)に記入する。
② 記入する内容は提示するが，まとめ方は自由。
③ 章の最初の時間に配り，章の最後に回収する。
④ 提出日を過ぎてから提出しても良い。
⑤ 提出の遅延による減点は行わない。

①，②は生徒が主体的に取り組むことを狙いとしたものである。③～⑤は「学習の調整力」「粘り強く学習に取り組む」ことを狙いとしたものである。特に，③で示したように，章の最初の授業でレポート用紙を配布することにより，授業の進度に合わせ，自分のペースでレポートに取り組めるよう配慮した。

④，⑤に関しては，単元終了後に復習としてレポートを活用する生徒もいることを配慮して行ったものである。「粘り強い取り組み」と「自身で学習を調整すること」ができれば，いつでも提出できる形にした。

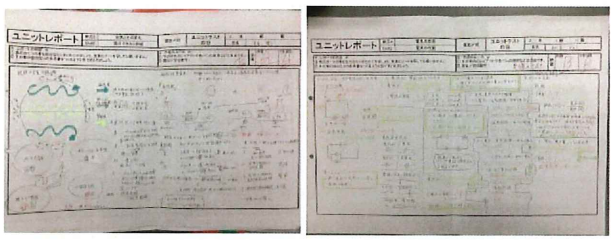


図３　章末レポートの作成例

（4）仮説を検証するための方法

ア　仮説①を検証するための方法

「章末テストの平均点」と「章末レポート」，「ワーキングノート」の相関を調べた。章末テストと２つの取り組みの相関を調べることにより，学習に「粘り強い取組を行おうとする側面」「学習の調整力」が「章末テストの点数」にどのように影響するのかを見とることができる。

イ　仮説②を検証するための方法

「章末テストの平均点」と「実力テスト（1・2年平均)」，「NRT テスト（1・2年平均)」の相関を調べた。

5.　成果と考察

（1）「章末テスト」で「主体的に学習に取り組む態度」を見とる妥当性

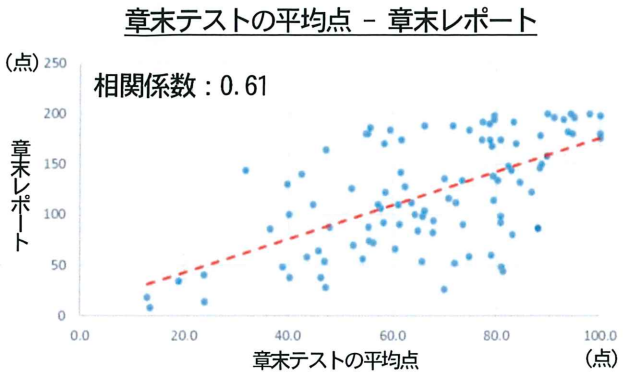


図４　章末テスト-章末レポートの相関

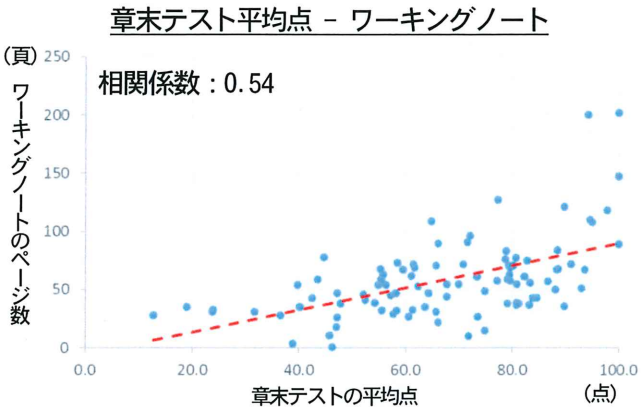


図５　章末テスト-ワーキングノートの相関

章末テストと章末レポートには 0.61 の相関があり（図４），章末テストとワーキングノートの取り組みには0.54 の相関が確認できた（図５）。章末レポートやワーキングノートは「粘り強く学習に取り組む態度」「自己の学習の調整力」を必要とする取組であり，「主体的に学習に取り組む態度」を見とるものである。それらの取り組みと章末テストの相関が認められたということは，「章末テストできちんと成果をあげることができる生徒は，主体的に学習に取り組む態度がある」と言える。以上のことから，「主体的に学習に取り組む態度」を評価する方法として「章末テスト」は妥当であると言える。

また，章末テストの平均点が 40 点以下にも関わらず追試を受けない生徒が一定数見られた（図５）。これは，復習すれば確実に成績が向上するにも関わらず，取り組めない生徒が一定数いたということである。この結果から，「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整する側面」は仕組みだけのはたらきかけだけでは十分ではなく，さらに別のはたらきかけをする必要があることがわかった。

（２）「主体的に学習に取り組む態度」と「生徒の学力」の関係。

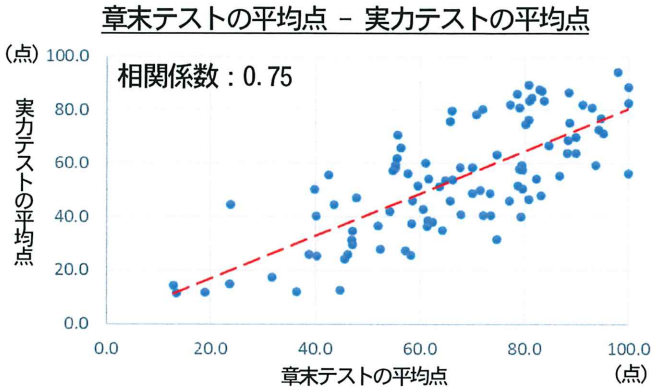


図６　章末テスト-実力テスト（１・２年）の相関

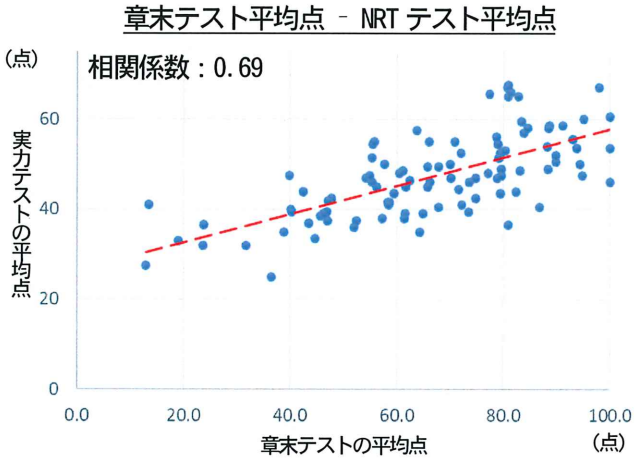


図７　章末テスト-標準学力テスト（１・２年）の相関

章末テストと実力テスト（１・２年）の平均の相関係数は0.75 となり（図６），章末テストと標準学力テスト（NRT テスト）には0.69 の相関が見られた（図７）。図４，図５の結果から，章末テストは「主体的に学習に取り組む態度」を見とるための有効な手立てであることが確認できているため、「主体的に学習に取り組む態度」と「学力」との間には正の相関があると考えることができる。

ここで，本研究における取り組み（章末レポート，ワーキングノート）と「学力」との関係をより精緻に見とるため，バブルチャートにて検証を行った。

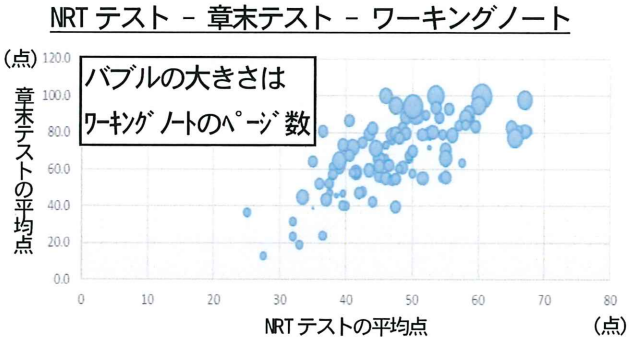


図８　NRT-章末テスト-ワーキングノートの相関

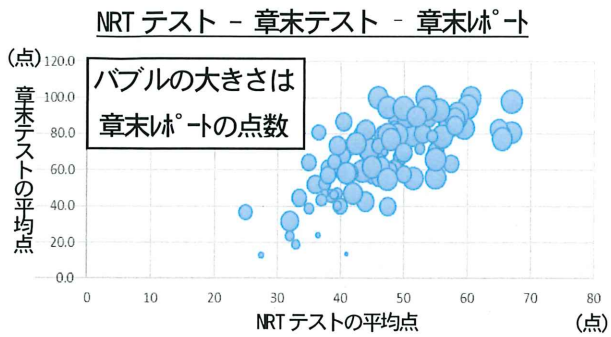


図９　NRT-章末テスト-章末レポートの相関

図８はNRTテストの結果と章末テストの点数，ワーキングノートのページ数の関係を示したグラフである。バブルの大きさはワーキングノートのページ数を表しており，右上に行くほど大きなバブルの割合が多くなる傾向が見られた。このことから，ワーキングノートは生徒の学力にプラスの影響を与えていると言える。

図９はNRTテストの結果と章末テストの点数，章末レポートの取り組みの関係を示したグラフである。バブルの大きさが章末レポートへの取り組みの度合いを表している。同程度の大きさのバブルが点在しており，ワーキングノートよりも学力との関係性がうすい。

6.　結論

生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を正しく見とるための手段として，章末テストは有効である。しかし，その条件として，章末テストに向けて生徒が「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」を発揮できるような学習ツールを提示するといった工夫が必要である。本実践では，生徒が自らのペースで学習を行う章末レポートやワーキングノート，章末テストに追試制度を設けるといった工夫を行うことでその有効性を高めることができた。

また，「主体的に学習に取り組む態度」と「学力」には正の相関が確認できたことから，「主体的に学習に取り組む態度」を育むことが生徒の「学力」を向上させる手立てに成り得るということである。それぞれの学校で行われている研究等では，単元や単位時間を中心とした学校の学習活動の中で生徒の主体性を育むためのデザインを行っているが，その中で「粘り強く取り組もうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」を発揮する機会は限られており，評価の対象としては不十分である。生徒の学習への主体性を育むためには，学校の教育活動外の時間を含めた，生徒の学びすべてをデザインしていく必要があり，それが生徒の「学力」の向上や「成長」につながると考えられる。

しかし，「主体的に学習に取り組む態度」があるにも関わらず，自身の力を伸ばすことができなかった生徒も存在する。その生徒は自分に合った学習方法が身についていないことや，単元による得手，不得手が影響していると考えられ，個別に対応する必要がある。

7.　今後の展望

今回の研究を通して強く感じたことは，生徒自身の「主体的に学習に取り組む態度の大切さ」である。そして，この力を育むことが生徒の確実な「成長」につながり，生徒が変化の激しい現在の社会を生きるために必要な力であると確信した。この力を正しく見とり，育んでいくためには，生徒が粘り強く，進度を調整しながら継続して取り組めるような授業を軸とした評価の仕方の見直しや仕組みづくりが必要である。今回の研究では，学校の副教材（ワーク）を活用した追試可能な章末テスト，従来のワーク提出や実験ごとのレポート提出の代替えとして行ったワーキングノートや章末レポートを活用し，その仕組みを作り上げ，実践したが，「主体的に学びに向かう態度」や「学力」を育めたかどうかは明らかにできなかった。今後は，生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を育む取り組みについて再考し，授業の中での学びのデザインだけではなく，授業時間外の生徒の学びをいかにデザインしていけるかという視点を持ち，実践していくことが教員の責務であると感じた。

近年では，生徒に１人１台のインターネット端末が配備され，その中にもGoogleWorkSpace やロイロノート等生徒の学びに有効なツールも学校現場で多くの場面で運用され始めている。今後は，これらのツールを活用し，生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を的確に見とり，積極的にはたらきかけていくかという視点を持ち続け，工夫を行い，生徒のより良い「成長」に向けた実践を真摯に重ねていきたい。

8.　参考文献

中央教育審議会　初等中等教育分科会　教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」平成31年１月21日